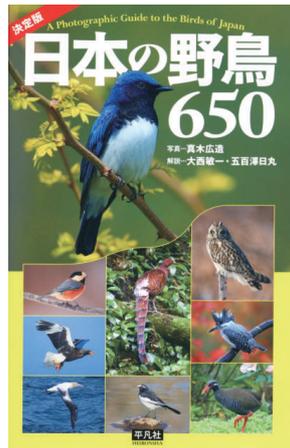


書評「決定版 日本の野鳥650」

森本 元 (山階鳥類研究所／立教大学)*

真木広造 (写真) 五百澤日丸・大西敏一 (著), 平凡社,
2014年2月, 788頁, 本体価格4,320円



すでに2014年も後半である。鳥類の図鑑に関する近年の話題といえば、やはり2012年9月に発行された「日本鳥類目録改訂第7版」であろう。その分類体系の大幅な改訂は、鳥類学者にとどまらず、一般のバードウォッチャーに至るまで広く話題となった。そしてこの新しい目録の影響を受けたと思われる図鑑（既刊の改訂版を含む）が続々と発行されたのは、昨年から今年にかけての図鑑業界の特徴であったといえよう。なにせ、新しい目録の発行によってそれまでの分類が古いものとなってしまい、既存の図鑑の知見が通用しなくなってしまった種が多々いるのだから、新しい図鑑の発行ラッシュとなったのは当然といえば当然なのかもしれない。そして本書はまさにその中の1冊といえる。本稿では、バンディングとの関わりという観点から書評を述べたい。

日本国内における鳥類図鑑の様子はこの30年ほどで劇的に進展した。一昔前、野外に持ち出せるハンディサイズのフィールドガイドといえば、「フィールドガイド日本の野鳥 (高野 1982)」などしか無かったのが実情である。それらはイラストによる解説図鑑であったが、その後、2000年前後より、各社から詳細な写真入りの図鑑が次々に発行された。野外のバードウォッチングにおいては、イラスト図鑑と写真図鑑はそれぞれに一長一短があり、どちらがよいかという議論始めると答えが出ないものである。ただ少なくとも言える事は、国内の図鑑における識別点の解説文章は、現状ではイラストを用いたものよりも写真図鑑の方に軍配が上がる状況だと思う。ゆえに国内で詳細な識別点の情報を書籍で野外へ携帯したいと思ったら、写真図鑑にせざるをえないのが現状だろう。

そして本書はそのような各社より発行されている写真図鑑の1冊である。多くの種が掲載されているだけでなく、亜種や齢識別の知見が豊富に掲載されている。著者や出版社にとって図鑑の作成にはどうしても制約がつかまとう。1種あたりに割り当てられた限られたスペースの中へ、どのような情報を入れるのかという問題である。読者の嗜好はさまざまであり、全ての読み手を満足させる事は不可能である。ある人は鳥類全体の生態を知りたいと思い、ある人は鳥が飛べるために備えた機能といっ

た形態的な能力を知りたいと思い、ある人は庭木にやってきた見知らぬ種の名前を知りたいと思い、ある人は年齢の識別を行いたいと思っている。このような多様なニーズがある中から、図鑑の執筆者は取捨選択してその方向性を決めねばならない。そして本書は、特に年齢や亜種といった詳細な識別に重点を置いているように感じられる。こうした識別のための知見は、一昔前（今ではそれ以上前かもしれない）には、バンダーならば知っていても一般的な国内の図鑑には載っていなかった情報も多い。過去の鳥図鑑には分布や生態、識別点として種と性の識別点等が広く浅く載っていたのみであった。いわば、年齢などに関連する詳細な形態形質の情報は、切り捨てられていた部分だったのである。日本産鳥類のそうした知見が少なかったこともあるが、それ以上に一般にニーズが無かったので、掲載されなかったのだろう。だが近年、前述した多数の写真図鑑の発行や、観察機器の性能向上に伴い、バードウォッチャーのレベルは格段にレベルアップした。別な視点から見れば、以前ならば主にバンダーが用いていたような識別のための知見が、一般のバードウォッチングにおいても活用されるようになってきている。山階鳥類研究所における回収報告においても、デジタルカメラによって撮影した高倍率画像でリング番号を読み取って、カメラマンが回収報告してくる例が増加しているそうだ。こうした方法で、羽衣を詳細に観察する事が可能な現代では、バンダーとバードウォッチャーの境目はますます無くなり、バードウォッチャーがバンダーのような観察を野外で行えるようになった。まさに両者が近付いてきているのだろうし、詳細な観察知見のニーズが一般化したともいえよう。そのようなニーズに応えている本書は、バンダーが実際にバンディングの場において識別を行う際にも、非常に有用な1冊と言える。著者である五百澤氏自身がバンダーであること、共著者である大西氏もバンダーと馴染みの深い方であることもあってか、本書の方向性はバンダー諸氏のニーズと一致するものと思う。

本書の分類についても触れておきたい。和名しか意識していないバードウォッチャーは多いと思うが、図鑑とは著者の分類に対する見解の発表の場でもある。どの学名を採用するか、どの分類体系を採用するかは、まさに著者の鳥類分類に対する考えの披露の場なのだ。鳥類の分類については、専門家間で概ね一致する一方で、細部については異なる意見が多数存在する。例えば日本の鳥類目録と海外の鳥類目録では、同じ鳥種についての見解が異なる点がある。これはまさに、目録を編集した著者らの考えを反映しているがゆえである。同様に、目録と一般の図鑑の間で意見が異なることも起こりうる。事実、当時としては、かなり保守的な分類を採用した日本鳥類目録第6版と海外の目録では分類体系に大きな違いが生じた。さらに、その後に発行された日本国内の多数の図鑑と目録6版が異なる点も散見された。本書は前版である「日本の野鳥590（真木・大西 2000）」と比較して大きく異なる分類体系を採用しており、今回は目録第7版に近い分類の解釈を提示している。このように複数の図鑑や目録についてどのような分類を採用しているか検討することも、バンディングを含む鳥学知見に触れる楽しみの一つである。

日本国内の鳥学研究やバードウォッチングのレベルは、時代とともに変化し発展し続ける。図鑑の方向性は、初学者向けや生態情報重視等、さまざまな方向性がありうるが、本書のような詳細な識別を重視した方向性はバンディングとの相性が良く、そうしたユーザー層の拡大は鳥類の形態学・分類学を発展させるだろう。バンディングと高度な図鑑の発展が、さらなる鳥学発展の相乗効果を生む事を期待したい。